

竈付き方形堅穴住居群の一発端

——大阪・寝屋川中流域の場合

一 瀬 和 夫

発 端

住居の形態は、弥生時代から古墳時代への移行する中で、近畿地方以西は円形から方形に変わる。それに続いて、火処は壁際に移動し、炉から竈・竈形土器セットになって、古墳時代後期・6世紀代には日本列島各地で普遍的にみとめられるようになる。特に後者は、渡来者集団の炊さん方式を示し、年代差よりは集団差と認識できると、石野博信氏は指摘した。また、その発生は弥生時代後期の類竈から近畿で漸移的に形成され、竈が全国的に普及したとした（石野 1975・1990）。その波及は段階的なものであったとする。

ただしその中で方形堅穴住居の一辺に竈を取りつけた結果、厨房空間が壁際に固定して住居内の土器保管場所の一定の約束事が明確となったと都出比呂志氏は指摘した。6世紀中葉の福岡県野黒坂遺跡34号住居では、須恵器の杯蓋・身4組、土師器の杯蓋・身5組、杯蓋2個、椀と鉢の1個ずつが竈よこに集中してあり、これらは4、5人分の食器とみなした（都出 1989）。建築、使用に規格化を伴って波及した向きがある。

少なくとも、この規格的、画一的な住居の変化への大半は、古墳時代中期・5世紀の間、日本列島各地で拠点的に起こった。そもそも畿内の住居は、弥生時代からの移行期である庄内期に至って、長く主流であった円形堅穴住居が途絶え、方形堅穴住居が現れる。それはごく一部で竈をもつた。しかし、全般には堅穴から掘立柱建物に取って代わろうとしつつあった。

1992年に行われた埋蔵文化財研究会では、竈付き方形堅穴住居の波及は5世紀初め頃には北は宮崎県まで、さらに6世紀には岩手県まで及ぶことが分かった（和歌山県 1992）。現在、その範囲はさらに拡大するが、この現象の端緒を垣間見る1つに、大阪府の河内平野部の内陸、寝屋川中流奥の湊的な地域の状況を挙げることができる（図1）。

河内平野を西にのぞむ丘陵端で5世紀前半の竈付き方形堅穴住居群を見る能够である。枚方撓曲がつくった崖沿い斜面に多くの住居が南北軸にそって検出された（合田 2004）。寝屋川市高宮遺跡で確認される29棟の堅穴住居は1棟の奈良時代のものをのぞいて、須恵器 TK216～TK208型式の短期間に存続し、一辺が分かる床面数は30面、その長辺は3～8m、平均4.6mの均質な大きさの方形のものであった。これらのほとんどに竈が取り付いたと考えるが、検出できたのは17基である。北半方向に取り付くものが優勢で11基を占める。

本稿では、この特徴的な竈付き方形堅穴住居群をケーススタディとして、短期間の間に集中的に生まれた住居群の性格と消長、前後する関連遺跡との関係、その群形成の計画性についても触れてみたい。



図1 寝屋川と高宮遺跡、蔀屋北遺跡

1. 高宮遺跡の短期堅穴住居群

高宮遺跡の住居は、T.P.19～30 m の急斜面に上中下の3群に分かれて雛壇に立地する（図2）。下段の西側には8棟（下西群）、その東に壁立溝でつくり出された平場をはさんで8棟（下東群）が、その上段には3棟の中群、さらに上段に9棟からなる上群があり、アパートのように住居が連なっていた。中群は数少ないように思えるが、後の掘立柱建物などによる古代・中世の造成のためで、本来、上・下群と同じように東西にひろがり、最終的には8棟あたりを単位として、4群で構成されていたと考える。ここでは良好に残る下・上段にある堅穴住居の状況を詳しく見てみる。堅穴住居は報告では堅穴住居1という表記であるが、ここでは数字のみで記述する（合田2004）。

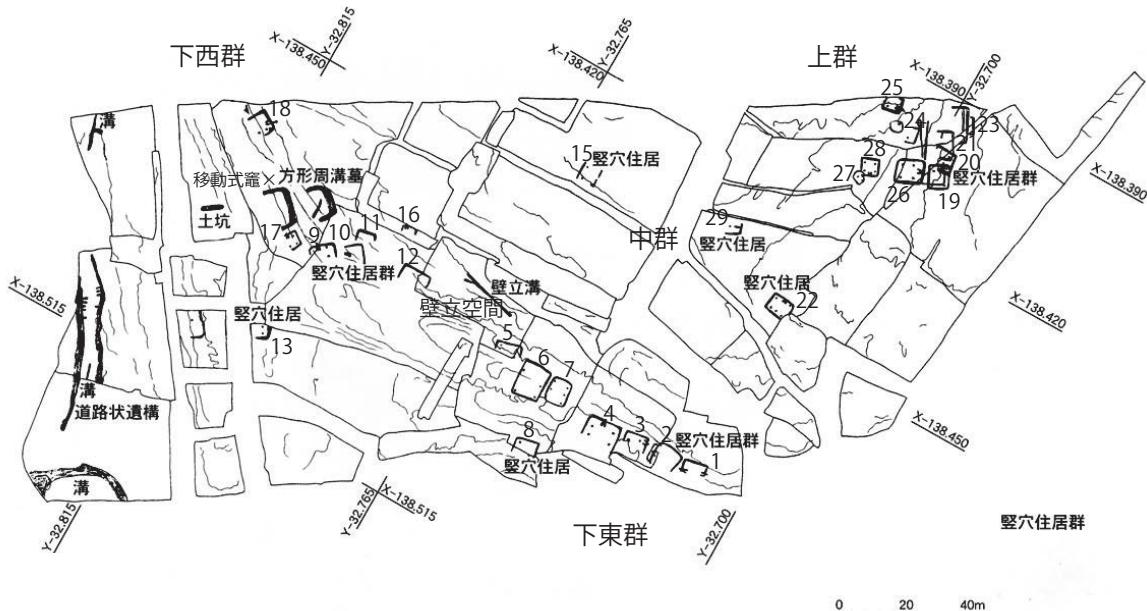


図2 高宮遺跡の古代以前遺構

下西群

下群は群中央にある壁立空間によって実際には連結するが、東西に分ける。東群と西群は壁立溝で斜面をカットして得られた平場をなす空間によって 20 m ほど離れる。また、下西群は 17 と 18 の間にある弥生時代の方形周溝墓を避けて分断するが、そのすぐ西側の溝 23 の堀割状になったところには、移動式竈が焚口を平野に向けて連結する。基本的に移動式のものは、屋内からの煙出しを考えると、屋外に持ちだして使うものであつたろう。この溝は竪穴住居の背面、傾斜地高所に設けられた周庭外溝として機能した可能性もある。これら一群は、他と軸を大きく異にして、平野に向いた傾斜面を利用して、それに平行している。

特に 17・18 は良好に残る。いずれも床面から 0.2 ~ 0.5 m あがったところから外方にむけて煙道が取り付く。17 は辺 3.5 m で北西方向の竈が付く。辺 4.4 m の 18 の下層は、北東方向の竈 2 から湿気抜きと考えられる幅細い溝が丘陵斜面下に向けて床面に掘り込まれる。この床面の 10 cm 上まではこの竈を使用したようだが、さらに 15 cm の厚さで床入れして最終の床面を整えた。その際、下面の竈 2 より東隅に竈位置を移して設けたようだが崩壊している。他の住居でもそうであるが、同じ竪穴で床面を整え直す時には竈位置・方向を大きく変えるものが多い。これには接して増設される住居等の施設との関係がある。

さて、下西群の東半は住居方向から 9 ~ 12・16 が一群となる。9 ~ 12 は壁溝に小穴があるのが特徴で、東側の 1・2 の上層の壁溝と共に通する。大壁状の壁面構造になるのであろうか。9 は辺 4.3 m で竈は北西につく。東側に 2 m の間隔で辺 3.2 m の 10 があり、軸が合う。やや南に離れるが 13 とも合う。10 の背後、東側にある 11・12・16 は下東群に軸が合う。すなわち、下東群の 1 ~ 8 と 11・12・16 が同一軸で東西に並ぶ（方位は XY 座標を参考に）。11 は辺 4 m、12 は下層が辺 4.3 m、上層が辺 5.7 m と西に拡張する。やや北側上に辺 3 m の 16 があり、北辺東隅に竈が付く。12 に付随しそうである。10 と 11 の切り合いから時期と軸を違えた抜本的な建て替えが 2 回あったことになる。その際、9・10 が新しいのであろう。

下東群

東は8を除いて東西一直線に並ぶ。最も東側の1は辺5m、東西に竈1基ずつある。西の方は下層に伴って竈2がある。燃焼部を中心に基部のみ上層の床面設置時の削平をのがれて残る。上層の竪穴は東に0.5mよせる。東辺中央にある竈1は、煙道以上の上部が削られる。2の上層も同じ大きさの辺5mで1の西に接する。ただし、元々下層は4mと小さく設定されていた。つまり、1が先行してつくられ、2がわずかに西接して増設され、その際、竈位置を西から東に移し、さらに西壁溝も東へ50cmよせた。しかし、2がやや大きくなることで、結局は間隔が1mであるために2と1の周庭は共有していたであろう。2を建て替えた上層では、上層の竈を東の1側をさけて西辺に設けたが、西辺側には3があり、それをさけて西辺側を東に1m縮めている。

3は辺5.5mと大きなもので、1mおいて2の下層に西接し、竈跡が2と接するものの2下層の西辺をややさけるように東辺の北よりに取り付ける。さらに2の上層は西辺を縮ませて間隔をとって2mとなる。その間に周堤まわりの排水溝を共有したと思われる。4は西に1.5mと十分に間隔をあけ、北辺5mの中央に竈を付けたが、その後にその辺を6.5mと東西に拡大した。

下東群は1と4がまず建てられ、1に付隨して2が、その際に1は竈を西から東に移動した。4は拡大して、おそらくそれに付隨して3が建てられたが、結果として2と3は窮屈に接してつくられ、3の竈は東でも北側にずらした。次の段階では2は西から東によせて3からやや離れ、その空間に竈の煙突を向けた。

1～4より6mとやや離れて5～8の1群がある。5～7は辺5～8mと大きいが、8は4.5mと小さい。

上群

上群は水平方向ではなく垂直方向へとブロックに分かれて連結する。辺6mの26の長方形住居を核とし、東・北東へ、北へ、西に分節する。

26は崩壊した竈が東辺中央にある。1.2m東で接する辺4mの19がある。19に20・21が北に重複する中にあって外周輪郭が明確であることから最も新しくなり、少なくとも柱穴から2回の建て替えがある。さらに床面下の北西よりに、辺3.7mの壁溝をもつ竪穴が見られる。つまり19～21の一群は、19と21の北辺中央には竈が付くことから、26の背後にまず21が建てられ、それから26に近づくように順次、下方の同じような場所に少なくとも5回は建て替えられたことになる。さらに北側に接して辺5.6mの23があるために南下したのかもしれない。

26の北の方は3m離れて24がある。その北東には3m離れて25がある。24は辺3mと小さいが、北隅に竈がある。その北の屋外2m、24の周庭まわりの溝と思われる落ち込みと溝からは移動式竈が出土する。ここでも屋外に由来すると考えられる。25は辺4mで東辺南端に竈が付く。壁面の傾斜をゆるくして、それに沿って煙道が立ち上がる。屋内へ1mまで焼土があり、竈本体は内方にのびる。オンドル的なものをかもし出す。この西側は未調査区となるが、ここから1ブロックは西に広がるであろう。

26の西には3m離れて28と27がある。28は辺3.5m、南辺の中央に竈が付く。これを切って3mの小さな隅丸長方形の27があるが、両者は接してセットになろう。こうした大小の関係は26と24にも考えられる。

以上の高宮遺跡の住居群は、辺4.6m程の竈付き方形竪穴住居が4群で構成、当初、3棟前後を基礎単位とし、それらを建て替えて維持するだけでなく、同じスペースで2、3倍に家屋数を増していった。にもかかわらず終息する。

この地は、弥生時代後期から間隔があいた後、突如として現れ、そして須恵器にしてTK216～TK208型式の間の短期間の居住で足取りがつかめなくなる。22の埋土をみると、この住居跡のある地点は、7・8世紀までくぼみとして存在し放置されていた。この地では、これ以降、6世紀後半、斜面下に道路状遺構が確認できる程度であり、その時期の遺構は北側の高宮廃寺でみられるにすぎなかった。7世紀に入って高宮廃寺、高宮、大尾と大きな範囲で遺構・遺物が確認でき、寺院、大形総柱掘立柱建物群などを中心に大きく展開していく。南側では寝屋川市小路遺跡をはさんで、讚良川の南、四條畷市讚良寺跡もある。いずれにせよ、高宮遺跡の住居群は短命で終わった。

さて集落構成では、下段の下西・下東群の間にある壁立空間は特徴的である。こうした空地について、都出比呂志氏は中田Iタイプで見いだしている（都出1989）。氏は東京都八王子市中田遺跡で6世紀の竪穴住居のみで34基からなるものを中田Iとした。これは3回の建て替えの累積で、3棟前後の住居群が継続したとする。つまり、それらは幅30～50mの中庭のような空閑地を媒介にして有機的に配列され、全体では3棟ほどの単位、4群の規模であったとする。

高宮遺跡も当初は同様な規模であり、しかも30mの壁立空間と言う空閑地がある。その両側に2群、東は1で東限となる。西は18から少し広がりそうだが、最終的に下段は20棟ほどを含む。3500m²ほどを占有する住居が密集する集落になる。建て替え状況が分かりやすい下西群の1～7は、当初、1、4、6がまず建てられ、次に1回目の建て替えで1と2、4と3がセットになって倍増して存続する。南北辺が8mと最大規模の6は5と7を伴った。この建て替えと増設は継ぎ、特異なことに建物群が最大になった時に集落活動が停止する。つまり、短期間で拡大し続けて停止するのが、高宮遺跡の竪穴住居群の特徴であり、増設なく長期に続く中田遺跡とは異なる。しかし、竈付き方形竪穴住居を中心として構成することはもちろん、当初は3棟を基礎単位に4群ほど、空閑地を伴うことは共通する。シンプルな竪穴住居群の基本型となろう。

中田Iタイプの性格について、都出氏は溝や柵列の区画がなく6世紀前葉の段階で4単位の住居群がすべて同時成立という特質を見出している。それは他地から集団的に移住したか、政治勢力の手で移住させられた「計画村落」の一種であったと位置づける。この村落の特色は、直木孝次郎のものを当てはめている（直木1979）。これは「当該村落の外にある力—公権力—によって計画された村」から引くところの、主に律令国家前の6世紀に当てはめたものである。高宮遺跡も計画的だと位置づけることができようが、この計画村落との関わりについては後で検討したい。

2. 蕎屋北遺跡の建物群

さて、高宮遺跡の古墳時代集落の前進や後続する集落が近辺にあるのだろうか（図1・3）。

遺跡周囲の視野を広くして見ると、より高所、東隣りの尾根に大尾・太秦遺跡の弥生時代集落があるが庄内期までは続かない。すぐ南側には、庄内期から布留期の周溝墓が小路遺跡にあり、それより南西方に広がる扇状地上に当該時期の集落が展開すると思われるが、未だその具体相はつかめていない。高宮遺跡のすぐ西側は縄文時代前期末以降の土砂堆積が発達し、弥生時代以降は水田が

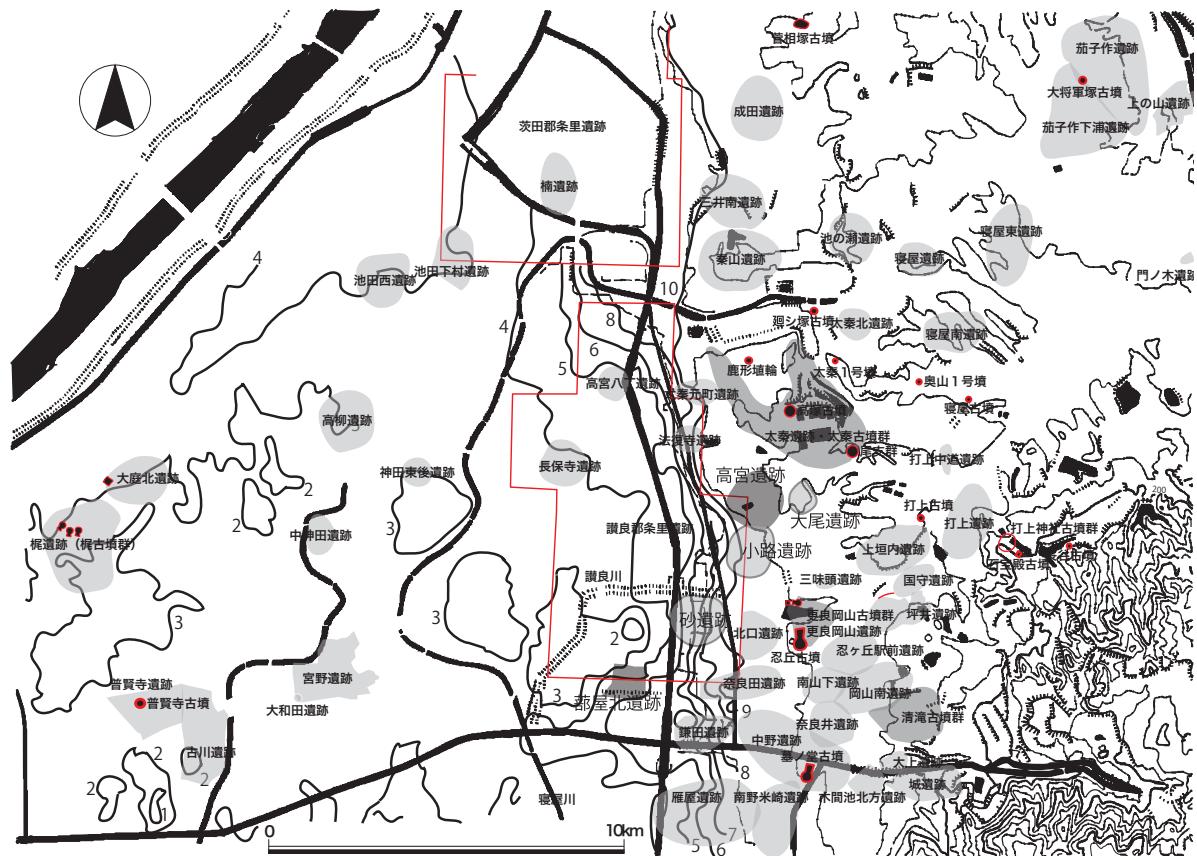


図3 河内平野北半の古墳及び古墳時代遺跡分布

維持される。この時期の拠点集落は南方の四條畷市雁屋遺跡になろうか。この辺りの T.P.0 m 以上の高さの微高地はあまり広くない。島状に突き出す程度で、居住域として大きくは発達しない。そうした中でも扇状微高地の高所をあえて追うと、高宮遺跡より点々と南西方向にのびる（図 1 の S）。ただし、その高所についても低地部の水位上昇のため、庄内期からは一旦、湿地化し、さらに陸化部分はそれぞれ細かく分断され、小規模な集落が点在する状況となった（後川 2015 他）。この付近は調査によって、井戸枠に船の転用材が多くあり、刳船が利用されていたことが分かり、船泊りやバッタリ的な施設も伴っていたであろう。こうした環境から高宮遺跡のように高地、しかも平坦ではなく急斜面の条件の悪い場所を集落域に求めたことになる。

つまり、5世紀はじめまで、安定した平地は小路遺跡辺りに期待するぐらいであるが、そこに高宮遺跡ほどの集約的に堅穴住居を集中させる小占有な集落ですら、空間的にさしはさむ余裕は急斜面にからうじて残されていたにすぎなかった。その小路遺跡の南西には縄文時代の堆積砂が隆起する四條畷市砂遺跡があるが、後世の削平も大きく、今のところその具体相は明らかでない（図1・3）。そのさらに南西低地に微高地が突き出すのが、四條畷市藤屋北遺跡の北端となる（藤田2010）。

蔚屋北遺跡北辺に沿って標高 T.P.1 ~ 1.5 m をこえる高さをもつ微高地があり、西南西に向かって下降する（図4）。確認される5・6世紀の居住域は、北東の標高 T.P.1.5 m の微高地を中心に北を底辺とする台形状の平面形を呈する。この範囲に建物が確認できるようになるのは、5世紀中葉のTK208型式に併行する時期からで、後葉にピークを迎える。このことからすれば、TK208型式併行期（時期の表記は、蔚屋北遺跡編年と組み合わせ、以降、208②と称する）と言う同じ時期に、集落

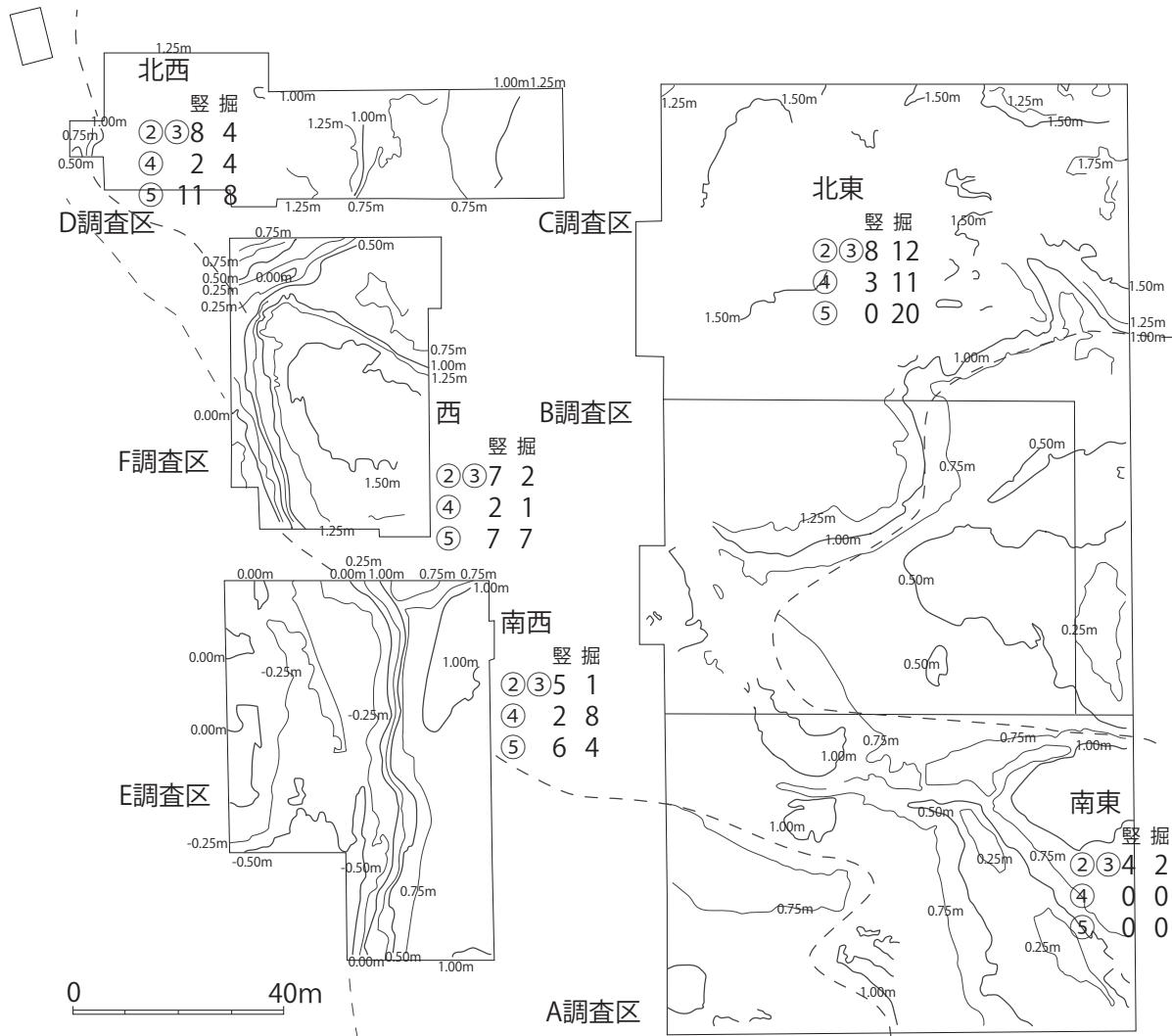


図4 郡屋北遺跡の北西・北東・西・南西・南東居住区の地形

(豎：豎穴住居、掘：掘立柱建物、②：TK208型式併行〈208②〉、③：TK23型式併行〈23③〉、④：47型式併行〈47④前〉・MT15型式併行〈15④後〉、⑤：TK10型式併行〈10⑤前〉・MT85型式併行〈85⑤後〉)

ピーカ・廃絶した高宮遺跡からこの地に置き換わったという推測は容易にできる。

本稿では、この両者に居住域の移動があり得たとするならば、その推移が自然なものであったかを概観しながら、高宮遺跡の特質を浮かび上がらせたい。

郡屋北遺跡では、総数73棟の豎穴住居が検出される。方形でほとんどに竈がつくことでも高宮遺跡との関連性を強調できる。その長辺は3.4～8.5m、平均で5.4mである。高宮遺跡の平均4.6mより大きい。個別時期が明らかなものでは、TK208型式併行(208②)が多く、19棟で少なくとも2回以上の建て替えがある。TK23型式併行(23③)が10棟、大きさにはばらつきが少なく4.18～6.3mである。TK47型式併行(47④前)が2～3棟、MT15型式併行(15④後)が2～3棟、TK10型式併行(10⑤前)が6棟、MT85型式併行(85⑤後)が5棟と推移する。結果、初期の5世紀中葉が最も多く、5世紀末前後にやや減少するものの、6世紀中ごろまで続く長期の豎穴住居群である。

一方、掘立柱建物は復元できるものが84棟あり、桁行は3.26～9.25mである。ばらつきが少

ないのは 208 ②での 4.33 ~ 6.28 m の長さであり、堅穴住居の 23 ③のものとさほど変わらない。大きいものは 10・85 ⑤の 6 世紀に入ってからで、3.58 ~ 9.25 m と規模に格差を伴うようになる。208・23 ②③で 21 棟、後半に総柱が増える。主屋建物と総柱倉庫がセットであれば、これに 2 棟の堅穴住居ほどが取り付く割合である。47・15 ④は 24 棟、10・85 ⑤は 39 棟と増加しつづける。長期とは言え、6 世紀後葉に家屋の柱が立ったままで放棄される。その後、最も高かった所は平安時代に至っても高く残り、基壇・島畠状になっていた。

居住域は北東や南西ブロックなど、5 箇所に分かれる（図 4）。208 ②において、8200 m² の北東では、切り合い関係から同時存在するものは 2 棟、2 回の建て替えがあったとされる。掘立柱建物も中規模の総柱があり、他の居住域より優勢であった。推定 1260 m² の西も 2 回以上の建て替えが確認できる。780 m² の南東では建物はこの期のみである。7200 m² の南西は船材の井戸、製塩土器土坑が特徴的で、広い機能空間と同居する。23 ③は集落拡大期で、南西で特に増加し、馬の埋納土坑がある。北東は総柱が増える。この 2 居住域に集約される傾向がある。各群は、均質な居住域からそれぞれ不均質な個性をもつものに変化していく。

47・15 ④では、北東・南西に東柱をもたない掘立柱建物が出現し、全体に堅穴住居、東柱無し建物、総柱建物の構成をとる。10・85 ⑤は北東では堅穴住居がなくなり、掘立柱建物で東の有無だけとなるが、南西・北西・西は堅穴住居、東柱有無それぞれの掘立柱建物で構成する。一方、西はむしろ、堅穴住居が増え、少なくとも 4 回の建て替えがある。

蔀屋北遺跡は掘立柱建物が含まれ、時期が降るにしたがって堅穴住居から置き換わり、その比率を増すとともに総柱倉庫が建物セットの 1 つに加わる。10・85 ⑤では、北東居住域が掘立柱建物のみ、西半の居住区で堅穴住居が多くなるなど、機能差と建物の組合せ格差が顕在化する。中でも、総柱建物は北東のクラ管理の集中を意味するであろう。以上のように、蔀屋北は 5 世紀の構造からは変質しながらも長期存続した状況が読みとれる。このことが高宮遺跡とは異なる。

高宮・蔀屋北両者の接点である 208 ②の段階では掘立柱建物の入り込みはまずは少数派であり、堅穴住居のみからのゆるやかな移行と言える。作りつけの竈は住居の北辺に多いが、少数ながら南のものもあることも共通する。異なるのは新しいものの中で並列 2 連の竈が堅穴住居 F13 であるぐらいである。移動式の竈は掘立柱建物と連動するのか、23 ③より顕著になる。方形の 2 連の以上ものも含まれる。

高宮遺跡では鉄鋌ぐらいが特殊な遺物であったが、蔀屋北遺跡では製塩土器土坑がいきなり 208 ②に出現する。馬埋納土壙は 23 ③である。船材転用は 208 ②からであり、この付近で前段階から湊的機能が引き継がれて活発に働いていたことが分かる。23 ③での 5 基の井戸は、すべて船材を転用する。多数の船を使用しており、朝鮮半島からの銀化した搬入甕なども目立つ。

蔀屋北遺跡の居住域ごとの堅穴住居群の入り込みは、当初の 208 ②で明らかなものは、北西が 3 棟、北東が 5 棟、西が 6 棟、南西が 1 棟、南東が 4 棟の 19 棟である。高宮遺跡の廃絶時の堅穴住居数は 4 群 25 棟ほどであり、蔀屋北遺跡は掘立柱建物分の増加を住居の全体数と見立てるなら、集落移動に伴って両遺跡は居住数的にもスムーズに移行したと見て取れる数字である。そうであれば、次の段階で、定着、繁栄し、「馬飼育」の場を備えた集落として軌道に乗るとともに、施設として各居住域はそれぞれの役割を付与され、均質的な居住グループ集落から建物ユニット格差のある不均等なものに変化して、掘立柱建物の比重を増すことになる。

3. 竈付き方形堅穴住居群の出現とその機能

高宮・蔀屋北遺跡に特徴的なことは、竈付き方形堅穴住居群である。ここではその出現期に関わる関東以西の5世紀代のものを概観し（和歌山県1992）、両遺跡の住居群を位置づけたい。

5世紀以前の早い時期のものは、福岡県で量的に目立つ。庄内期の福岡市西新町遺跡、400年前後に、うきは市塚堂遺跡の群在が見られる。他に大阪府堺市四ツ池、京都府久御山町佐山、京都市水垂、滋賀県東近江市西の辻といった遺跡が早い。北九州と近畿中央部がいち早く波及拠点となるが、庄内期から400年以前の段階では方形堅穴住居に竈が付くものがシンプルに群在している状況であるとは言いがたい。むしろ、掘立柱建物への本格的な移行期であった。ところが5世紀に入ると、東北地方まで及び、宮城県亘理町宮前、仙台市岩切鴻ノ巣、藤田新田といった遺跡では長辺3.5～6.7mの大きさのものも検出される。

埋蔵文化財研究集会資料から5世紀代の全般的な堅穴住居の傾向を見ると（和歌山県1992）、まず方形である。100棟当たり竈付きのものを見ると、その方向は北半が8割、東西向きが1割、南半が1割であり、圧倒的に北向きが主流である。大きいものは福岡県筑前町切杭遺跡の9.2m、大阪市法円坂遺跡の8.25mがあるが、全体に2.7～6.6mに集中し、長辺での平均は5mとなり、高宮遺跡の平均4.6m、蔀屋北遺跡の平均5.4mの間にに入る。明らかに、北向きの作り付け竈、辺5mの方形堅穴と言うモデルがあったと見て差し支えない。5世紀段階で建築、使用に際して何らかの規格があった。

高宮遺跡はこの竈付き方形堅穴住居モデルの初現的なものと考えるが、居住はもちろん、他にいかなる集落の機能と性格をもっていたのであろうか。堅穴住居主体で、その発生時に類似し、集落の位置付けが分かりやすいものを今少し提示して比較、検討してみたい。

1つには、大阪府堺市小阪遺跡がある（森屋1992）。陶邑窯跡群の須恵器窯が特に集中する高蔵寺（TK）と陶器山（MT）の地区の谷筋の下流、石津・陶器・前田川の合流点に位置し、いかにも初期須恵器と関連性をもつ。3～5m規模の堅穴住居6棟、平地式住居2棟、掘立柱建物3棟が検出される。堅穴住居には竈が残るものがある。その立地ゆえに、土器が特徴的である。須恵器の他、韓式系土器の鉢・甌、須恵器の影響をうけた高杯が出土する。

全体の出土土器は、須恵器生産がはじまった朝鮮半島系の当時のものではなく、在地工人との交流で型式変化しているものであり、労働力拡大期にあたるTK85型式段階から渡来系と在来系が融合した状況下の新たな生産基地の1つと評価される（森屋1992）。集落の存続中心期間はTK208型式までで、須恵器が定型化しつつも、未だ過渡的な過程にあった時期に貢献した集落と位置づけられる。大甕中心の生産から杯への移行、畿内産モデルの定型化にあたる時期にあった接点の場として設けられたキャンプ性が感じられる。さらにこの場所は、須恵器生産が活発化するための粘土・水の確保はもとより火力・森林資源の豊かな地域に入り込もうとする玄関口であった。そこから生産集団の系統が分かれることから、周囲の集落、大阪湾からの遠方の訪問者との関所、交流と集団分けの役割を果たすことで、須恵器の定型化、その波及に存在感を發揮した集落であった。

高宮遺跡についても、丘陵側背後、図3中央やや右上にある奥山1号墳の南側の谷筋は、大がかりな須恵器生産域であった。そうした山間部への入り口となる役割を備えた可能性もある。

2つ目は、同じような時期でより目的的な集落例として、大阪府高槻市新池遺跡がある（森田1993）。

この遺跡は継体陵と目される今城塚古墳の埴輪供給の窯跡群として知られていたが、それよりも半世紀以上古いユニットが検出された。南側の丘陵端斜面に3基の埴輪窯と、その背後丘陵上に辺11～12.8mの大規模な埴輪工房である3棟の堅穴建物、それらの東に60mほど離れて14棟の堅穴住居群がユニットを成していた。これは明らかに大阪府茨木市継体陵古墳の埴輪生産を契機にする、いわば古墳造営キャンプの一角を構成するものである。ただし築造後も、しばらく窯経営が続いた。それはON46・TK208型式の期間となる。この時間帯は、高宮遺跡からはやや新しく、蔀屋北遺跡の本格集落のはじまりよりは先行する。

方形堅穴住居群は、辺2.2～7.2m、平均4.7mの方形のもので、平均4.6mの規模の高宮遺跡の住居とほぼ同じである。北・東方向に5基の竈が取り付くことも確認され、他のものにも焼土がある。2、3回の建て替えが考えられ、當時6、7棟が併存した。2号住居の壁溝には柱列がある。当初の住居はON46型式を中心とした時期で、1・2・4・11号の主柱・周溝のあるAタイプと、3・13号の主柱・周溝なしのBタイプで構成される6～7棟ほどのまとまりが指摘される。おおむね高宮遺跡の当初の半分の集落規模である。須恵器は杯が多いのが特徴で、砥石、鉄滓、玉、滑石製品、東海系の甕も見られる。埴輪窯の下にある沼では山陰系の大甕がある。この集落での埴輪の生産にあたって、東海・山陰との交流があったことは誤りない。

つまり、継体陵古墳の埴輪生産を目的に計画されたキャンプの設定規模は、標準より小さめの6～7棟ほどの竈付き方形堅穴住居の1群であり、外来集団との共同作業があった。調査担当者の指摘では、この規模で、大形方形堅穴建物の埴輪工房、埴輪窯に伴って、粘土・薪といった原材料調達、埴輪運搬などを考慮すれば、人手不足は明白であるとする（森田1993）。実際の作業達成には近隣集落との協力体制を想定しなければならない。すなわち、直接的で特殊な埴輪工人キャンプが最小限の空間で特別に計画され、一般労働の参加やそれら食糧供給を軸にした作業は近辺からの協働参画という生産体制の枠組みが浮かび上がってくる。ここでの竈付き方形堅穴住居群を中心とする集落の発生原因は、外来の埴輪工人を住まわせる「計画集落」であったと規定できよう。そこに機能を伴った建物と窯も接して付随していたと言うことになる。

古墳造営コンプレックスの一角と目される中で、当初から築造古墳の位置からやや離れて居住区を集中的に構え、直接的な古墳築造の後も居住が継続した例として、大阪府藤井寺市土師の里遺跡例がある（松村1983・三木1999他）。この場合、蔀屋北遺跡と異なるのは、生業基盤や掘立柱建物などを付随させるような集落構造をもつことやそうした複合体への変容がないことである。堅穴住居中心に継続することからすれば新池遺跡に似るが、それは埴輪工人に限定するものでない古墳造営に関わる外来集団を隨時、受け入れる機能をもった空間であったと考えられる。

小阪遺跡は堅穴と平地式との混合、新池遺跡は堅穴のシンプルなものであったが、棟数から比較すれば、堅穴住居は同等であり、前者は須恵器生産だけでなく生産環境の調整機能を含む建物ユニット、後者は埴輪生産に特化した工房・窯が加わるユニットという相似した集落規模に機能面を付随させる集落であった。この両者について規模と立地で省みるならば、近辺に主たる農耕基盤を求める農耕集団の居住ではなく、両者とも窯業に関わる手工業生産集団の集落である。その特殊さゆえの生業のために、その当初は上層階層からの居住区の割当てを前提として計画された集落として出現したと見ることができるのでないか。

4. 高宮遺跡の短期竈付き方形堅穴住居群の性格 ——発端と波及をめぐって

石野博信氏によれば、方形堅穴住居は弥生時代中期が59%（近畿地方は1%）、後期が63%（近畿地方は34%）。古墳時代前期になると88%、中期には100%に近くなると言う（石野1975・1990）。この中期・5世紀の変化からすれば、その前半に設けられた高宮遺跡のような竈付き方形堅穴住居群は、そのモデルの波及の早い段階にあたり、変容の一翼を担った位置にあると言えよう。

高宮遺跡の居住規模は、蔀屋北遺跡の本格稼働の初現に引き継ぐためには順当と言えるが、「馬飼育」という特殊施設を合わせもつには空間的にせまい斜面地があった。つまり、高宮遺跡は限られた場所の居住に特化された入り込みを目的とした集落であり、周辺で別に機能エリアを設ける必要があった。支配者の政治空間以外でのフィールド空間であるとして平野側を見るなら、前段的な人馬の受け入れを伴う飼育エリアの設定の試みのみが蔀屋北遺跡近辺で模索、分離経営されはじめた段階と同時に、居住域が特定的に確保された段階とみたい。その機能は、後に継続する蔀屋北遺跡の展開から、湊的な交易基地・牧が十分に考えられる。一方、内陸の谷筋に向けては新池遺跡や小阪遺跡のように、窯業や鉄鍛冶などを推し進めるために実現可能な工人居住集落の規模でもあったと言えよう。これら多様な展開のための基礎単位が、それぞれの機能エリアと結び付いてユニット化していく端緒を開いた存在が、高宮遺跡の竈付き方形堅穴住居群であったと見たい。

ただし一方で、繼体陵古墳建築コンプレックスの方は、初期段階から計画的にすべての土地占有が配分されたであろう。高宮遺跡の方は多様な機能を展開させるため、段階的、計画的に割当てられたものの、その目的が必ずしも不確実な集落であったとみる必要もある。その多種多様な機能の拡大をもって、集落は発展的に放棄されたとみたい。

その発展項目は鉄利器と火力に関わった手工業と飼育とみるが、今言う5世紀の「計画集落」の機能の中では、農耕地の開拓が主力であったとはとても思えない。この地の平野部はすでに弥生時代に水田化されており（一瀬2024）、その一部が浸水、湿地化して放棄したエリアが生じた。そこが水位低下に伴って陸化したエリアとなった。それは可耕地面積として広がるよりも、蔀屋北遺跡の居住域と劇的な牧の面積拡大につながったユニットの大型化に至った。そして、その後の集落内の変化をみると、それぞれのゾーンは機能分化による不均衡をもたらして、強固に一体化した集落構造をその地で創出したと考えられる。一方、内陸部への機能の働きかけとその拡大の見通しについては、今後の周辺調査に期待したい。

特定の機能を想定した場合、酒井龍一氏のいう永住型の「拠点集落」に対しての「機能集落」に感じるかも知れないが（酒井1982）、これは弥生時代中期社会の集落が等質的で相互に格差が生じにくい構造を前提としたものであった。古墳時代中期・5世紀では均質的ではない重層的な階層関係が整備、確立される中で（一瀬2024）、支配的にすでに占有しつくされた土地にクサビを打つように割り込ませるような集落構造をイメージしたい。

取り上げた遺跡は、いずれも「計画集落」と名付けてよいだろう。そこで先に触れた「計画村落」なるものがある。これとは一定の区別がつきそうである。直木孝次郎は、4世紀末・5世紀初頭の鉄器増大に伴う大規模な開墾事業のためのものと位置付け（直木1979）、都出比呂志氏もおそらく6世紀ゆえの中田Iタイプで関連付ける。特に、直木は開墾が5・6世紀に急速に進行して朝廷

またはその指示をうけた地方豪族の力による開拓地の村落像を提示する。そこにはその後の律令国家へと連なる屯田的な農民の集団的移住、大化前代に条里制地割の前進への前段階のプロセスとして直接的に結びついている。そして「朝鮮にまで支配の手をのばしていた朝廷が、大化前代にこれに近い集団移住を行うだけの力をもっていなかったとは考えにくい」ともする。開拓目的だけでなく、これまで見た集落状況は、多彩な別の機能を伴って段階的に、内外の集団移住がその都度頻繁にあったことを物語る。

5世紀の竈付き方形堅穴住居群はそのうちの大きなインパクトのある発端を示す1つであり、それは農耕を基盤にした在来集団間の隙間に、一時的、別機能・技術を携えてあえて入り込んだ計画的なものばかりである。高台の土地への農耕地の開拓が期待されるようになるのは6・7世紀以降のことになる。

状況的には、日本列島各地の集団移住、朝鮮半島との交流・交渉と技術移転に関わる居住を一時的、特定的に設ける計画性を伴った場として、高宮遺跡を代表例とするような集落が5世紀型計画集落形成への発端の1つになったと考える。同時に、こうした計画集落の各々に芽生えた機能は新技術の交流拠点となり、短期間の間に日本列島各地に波及し、周辺にも多種多様に影響をもたらせたと考える。

矢野健一先生は、京都大学在学中には濃いお酒を遅くまで飲む姿、辰馬考古資料館の学芸員時代での仕事、最近では世界考古学会議、京都府埋蔵文化財研究会での作業など、なつかしく思い出される。

本稿は先生の集落変遷や比較研究にからんで、少しはその研究にかすりはしないかと、ご退職に合わせ起稿した次第である。ご笑納いただければ幸いです。

引用・参考文献

後川恵太郎他 2015 『讃良郡条里遺跡 イオンモール四條畷建設に係る文化財発掘調査報告書』 公益財団法人大阪府文化財センター

石野博信 1975 「考古学から見た古代日本の住居」『家』 社会思想社 (1990 「古代日本の住居」『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館所収)

一瀬和夫 2005 「河内平野変遷に関する覚書—北半の旧石器から古代像—」『古代学研究』 169号

一瀬和夫 2024 「畿内大弥生・古墳社会の空間構造」『日本考古学の論点』 広瀬和雄編 雄山閣

合田幸美・木暮律子・一瀬和夫 2004 『高宮遺跡』一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—遺構編— 財団法人大阪府文化財センター

酒井龍一 1982 「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」『亀井遺跡』 財団法人大阪文化財センター

都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』 岩波書店

直木孝次郎 1979 「古代国家と村落—計画村落の視点から—」『ヒストリア』 42号、大阪歴史学会

藤田道子他 2010 『藤屋北遺跡I—なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査—』 大阪府教育委員会

松村隆文他 1983 『土師の里遺跡発掘調査概要』 V 大阪府教育委員会

三木 弘他 1999 『土師の里遺跡—土師氏の墓域と集落の調査』 大阪府教育委員会

森田克行他 1993 『新池 新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会

森屋美佐子他 1992 『小阪遺跡—近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書』 財団法人大阪文化財センター

財団法人和歌山県文化財センター 1992 『第32回埋蔵文化財研究集会資料集』

(京都橘大学名誉教授・本学非常勤講師)

The Startbeginning of Square Pit Dwellingdugouts with Kitchen Range: The Case of the Middle Reaches of Neyagawa River in Osaka

by
Kazuo Ichinose

This paper outlines that the group of square pit dwellingdugouts with kitchen range from the 5th century, during Japan's middle Kofun period, are all likely to have been built temporarily, filling gaps between indigenous arable land groups, bringing with them different functions and technologies. The context of these dwellings indicates that they were planned, temporary and specific, for the purpose of mass migration around the Japanese archipelago, and for exchanges, negotiations, and technology transfers with the Korean peninsula.

The Takamiya site in Neyagawa City, Osaka Prefecture, are a representative example of the formation and spread of base settlements around the Japanese archipelago. This was one of the beginnings of the formation of 5th-century planned settlements. At the same time, it is presented that the functions that emerged in each of these planned settlements became hubs for the exchange of new technologies, which spread throughout the Japanese archipelago in a short period of time, and served as a model for the impact they had on the surrounding areas.